4) 高校衛看・専攻科を通じての総合的看護へのアプローチの試み

高知中央高等学校　山崎　美恵子（5回生）
浜田　弘子（7回生）

Ⅰ はじめに

看護学の教育方法における基本的な進め方を直接決定するのが、看護の科学性と実践性である。この2つを兼ねそなえた看護婦を育てることが看護教育の大きなねらいである。

私達は高校衛看、専攻科を通じて総合的看護へのアプローチへの仕方について過去4年間試みたことを報告する。

Ⅱ 学校紹介

沿革　昭和41年4月　看護科設置
（普通科・家政科・商業科・看護科）
昭和44年4月　専攻科設置

入学生徒数の動向

表Ⅰ　入学生徒数の動向

入学年度 / 高・専別	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
高校衛看	51	57	120	129	127	146	146	140	152	154	159
専攻科				35	21	35	17	27	62	45	50

表Ⅱ　専攻科入学生出身校別・経験年数

入学年度	44	45	46	47	48	49	50	51
本校衛看卒	25	16	24	11	17	50	41	38
普通高校卒 3年未満経験	4	1	5	0	3	3	1	1
〃 3年以上経験	6	4	6	6	7	9	3	11

表Ⅲ　看護教員と担当科目

	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
看護総論系	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
成人看護学系	1	1	3	4	6	6	7	6	8	8	9
母性　〃	※	1	1	1	1	1	2	2	2	3	3
小児　〃	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2

※　各教員が分担して受持っている。

Ⅲ　高校衛看における看護学校総論の分析

波多野梗子氏の論説によれば、看護教育の流れを看護概論でもって看護をどう考えるか、その基本的方向を示し、各論でもって保健と疾病への看護を教え、実習を通じてその実践性の意義を修得さすという姿勢で私達も看護教育にたずさわっている。しかしながら高校衛看における看護総論（看護概論１５時間、看護歴史１５時間、看護倫理１５時間、看護技術２１０時間）を実際に高校衛看発足以来過去１０年間担当し感じたことは、看護歴史では年代と歴史的事実の暗記的理解は可能であってもその時代における人間の理解、その社会と看護とのかかわりあいを理解するまでにはいたらない。

さらに看護倫理においても何故、どうして看護婦はこうあらねばならないかを理解した上で実践へ持っていくことはできず、行動の一つ一つの理解は出来たとしても、それらを関連づけることはむずかしい。このことからしても看護概説で看護とは何か、基本的方向を力説してもとうてい不消化に終ってしまい概念を概念としてとらえることすら出来ないように思う。これは中学校を卒業した１５才という年令と現代社会の風潮として、じっくり物事を考える訓練が幼少の頃からできていない為だと思われる。ただ、看護技術においては技術の反復練習を何度かすれば、これは可能である。不消化であっても従来の各科の看護法にとどまることなく、ある程度の方向づけは授業内容にもりこんでいかなければなむないと考える。

Ⅳ　専攻科における看護学総論の分析

高校における看護総論は１年次で終了し、各論でもって各科の講義、実習を通じての３年間の学習経験をもって入学してくる専攻科生に対する看護学総論の授業展開は、総合保健医療の中における看護の概念、役割を認識させ、看護の知識及び技術の基本的理解とその応用能力を養い、より高度な看護を行なう専門職業人の教育を目標にしている。文部省カリキュラムにおける看護学総論（概論３０時間、管理１５時間、技術７５時間、総合実習１５０時間）において上記の目標を達成させるために総合的アプローチは、いろいろな工夫が必要だと思う。学校側の持つ条件として、学習経験、能力、

意欲の差にもよるが、講義のみでは、看護の概念が概念でおわり、言葉では答えられるが、実際の看護活動とは結びつかない。専攻科における看護学総論の校内実習については、神奈川県立衛生短大のレポートを参考にしているが、看護の実践を裏づける科学的知識、総合保健医療の中の一環である看護の意義を養うために総合実習１５０時間の活用のしかたを本校は卒業論文（以下卒論という）に当て学生の看護研究を指導することによって、その効果を期待している。

表Ⅳ　看護学総論の内容・時間数

内　　訳	１年次	２年次	計
看護概論	30		30
看護技術	75		75
看護管理	15		15
総合実習		150	150
計	120	150	270

Ⅴ　高校衛看と専攻科の看護学総論の到達目標

高校衛看	看護概説 看護についての歴史、倫理、原理および法規に関する知識を習得させ、看護の対象と役割を理解させるとともに看護する者として必要な態度を養う。
専攻科	看護学総論 看護の対象や機能などについての理解と認識を深め、保健医療において看護を行なうに必要な基礎知識、原理、技術および態度を習得させる。

Ⅵ　本校における卒論への取り組み

(1)　目　　的

正田氏、氏家氏、波多野氏の総合実習に対する考え方は、看護教育その他の文献で多々紹介されているが、本校での考え方としては、各論で学習される対象による個別性を含んで、それぞれの状態における看護上の要求を充足させていくべき看護とは何かを考えさせた上に、これまで学習してきたすべての能力を統合して実際に看護を行なってみること、また看護の共通性から考えて病院、地地域、施設でおこなわれている看護をもうらした形で看護を考えさせること、或いは健康のレベルの高低に対して、どのように働きかけるかを考えさせることであると解釈している。その目的達成の

ために個々の学生に１５０時間を与え、上記の目的をふまえたレポート作成をさせている。

(2) 生徒のグループ分け

表Ⅴのように１グループ５～６名のグループ学習とし、その編成については生徒の自由意志を尊重した。好きな者同志でグループを編成し、テーマを決めたグループ（昭和４６，４７年度入学生５２名）テーマを選択しグループを編成したグループ（昭和４４，４５年度入学生５６名）の２つに分かれている。

表Ⅴ　グループメンバーの編成のしかた

編成のしかた	人数（%）
1　好きな者同志でグループを編成しテーマをきめる	５２　(５２%)
2　テーマを選択し、グループを編成	５６　(５６%)

(3) 卒論のすすめ方

卒論に取りかかる時期は、２年次の４月～６月頃までにはテーマの決定、グループ編成、指導教員の決定を行ない、７月末からは取りかかり始めた。指導教員は学生から出されたテーマに対して表Ⅲに示す担当科目別教員が１グループに１名助言、指導にあたった。その内容については次のようである。

1. テーマの提示　－　本テーマを選んだ理由と到達すべき目標
2. 文献検索とその利用方法
3. 情報の収集とその整理の方法
4. 論文の書き方とまとめ方
5. 研究発表の方法

過去４年間における卒論テーマの主なものは次のようである。

卒論テーマ（　）内はグループ人数

- 高知県下の老令者の身体的、精神的、社会的側面の実態調査　(3)
- 患者から見た看護婦について　(6)
- 看護婦と健康生活について　(6)
- 交通災害による被害者の実態とリハビリテーションの方向づけ　(7)
- 死に直面した患者の看護への第一歩　(6)
- 産褥期における保健指導　(6)
- 老人看護における看護婦の役割　(5)
- 内科病棟における安静について　(5)
- 結核病棟における安静とフラストレーション　(5)
- 高知県における重症心身障害児の実態調査(6)

- 小児病棟における長期入院患者の問題点 (5)
- 外来看者をみつめて (6)
- 看護業務分析での現状と理想 (6)

Ⅶ 卒論に取り組んでの結果

このような過程を経て実際に卒論に取り組んだ生徒に対して、在学中及び卒業して後の感想等をアンケートによってまとめてみたので、以下それにそって考えてみたいと思う。

対象：在学生は４８年度入学生２７名　卒業生は４４．４５．４５．４７年度入学生１０８名中７８名

回収率：７２.２％

(1) グループ編成について

私たちが卒論を進めるにあたっての学習形態としてグループ学習を選んだ理由は、看護の実践そのものが、人間関係を土台にしてはじめて成立し得るために、チームワークの基礎トレーニングになり、これは看護の学習過程で意識的に育成されなければならないと考えるからである。実際、学生の感想は表Ⅵのとおりである。好きなもの同志で集まったグループでは、６８．４％、テーマが先にあって集まったグループでは７７．７％が卒論を仕上げる上においては〝よかった〟と感じている。（その感想の内容については、自由に意見を書かせたために両グループの意見がまちまちである。）

私達教師側は、グループを先にするか、テーマを先にするかについて多少の不安を持っていたがこの結果からいずれであろうとも、自由に意見が出せ、分担作業がスムーズにいったと述べているから、チームワークの基礎トレーニングの目的は達成されたと考えられる。

表Ⅵ　グループ編成についての感想

好きな者どうしのG編成の場合

意見	46．47年入学生５２名中３８名回答	人数（％）
よかったと感じたもの	自由に意見が出せた	2（5.2％）
	個人個人の良さを十分引き出し仲間の新しい側面を知った	4（10.6％）
	分担作業がスムーズに出来た	4（10.6％）
	遠慮なく、ものがいえた	11（28.9％）
	協力性が養われた	5（13.1％）
わるかった	仲良しすぎて、ゆずりあいがなかった	2（5.2％）
	友達を頼りすぎた	4（10.6％）
	自己中心的になってまとまらなかった	2（5.2％）

意見		人数 (%)
どちらともいえない	協力できた点もあり、非協力的な点もあり、どちらともいえない	4 (10.6%)

テーマを選択したこと即G編成の場合

意見	44，45年入学生56名中40名回答	人数 (%)
よかったと感じたもの	自由に意見が出せた。 まとまりやすかった。	21 (52.5%)
	全員が意見を積極的に出せた	10 (25.0%)
わるかったもの	一人の分担量が多かった	9

(2) 社会的資源、人的資源の活用について

高校の段階において視野の拡大、即ち社会的資源、人的資源を活用する素地として行なってきたことは、衛看2年次の基礎実習の中での施設の見学実習および文化祭における健康に関するテーマにに基き施設訪問、簡単な地区診断の仕方を指導助言してきたが、総合実習の見地から、なぜ、それらの資源を活用しなければならないのかの理論づけをするための時間は、組みこまれていない。しかし専攻科の過程においては、一般教養科目、看護総論、成人保健、母性保健、小児保健を履習する過程において、全人的看護、総合看護の理念のもとにカリキュラムが組まれ展開されている。このことは、高校での教育の上に、全人的看護、総合看護を実践してゆくための知識と理解を与えることになる。今回総合実習で卒論に取り組ませたとき、表Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ のように社会的、人的資源を自然な形で活用できたことは高校のときに経験したことから、更に理論をふまえて行動にうつすことができたと考えられる。衛看在学中には、教科書、問題集、看護技術（月刊雑誌） 資格試験（月刊雑誌） 必要時図書室にて専門書を2～3冊ひらくのが現状であったものが、約20%のものが100施設（延べ数）以上を訪問し、50%以上のものが1.000人（延べ数）以上の人と面接し、80%以上が6冊～15冊までの本を読んだことは、収かくであった。文献を読むということに関して、指導教員の役割としての〝文献検索とその利用方法〟についての指導は、衛看生の現状を私達が十分知っているが故に適切な動機付けができたのだろうと思う反面、私達の労力を費やすところであった。

表Ⅶ　活用した社会的資源（１０５名）

（訪問施設数）

施　設　数　（延数）	人数　（%）
１２６　施設	２２名（２０.９%）
４８	１４　（１３.３　）
３４	２６　（２４.８　）
３３	２２　（２０.９　）
１０	４　（　３.９　）
５	３　（　２.９　）
４	１４　（１３.３　）

表Ⅷ　活用した人的資源（１０５名）

人　　数　（延数）	人数　（%）
１２００人	３２名（３０.４%）
１０００	２１　（２０.１　）
７８０	３　（　２.８））
６２４	３　（　２.８　）
４６８	４　（　３.８　）
３６０	１０　（　９,５））
３００	２５　（２３.８　）
１５６	７　（　６.８））

表Ⅸ　卒論完成までに読んだ

冊数	人数　（%）
１～　５冊	２１名（２０　%）
６～１０冊	７０　（６６.６　）
１１～１５冊	１４　（１３.４　）

(3)　卒論に取り組み中困ったこと

卒論に取り組み中〝困ったこと〟について、質問し、自由にら列してもらった結果が次の通りである。

表Ⅹ　　卒論に取り組中困ったこと

1. 対象が家庭であったために配布と回収が困難であった。
2. 論文として表現方法に不慣れなため困った。
3. テーマが大きすぎて困った。
4. 時間がたりなかった。
5. 研究意図にそったアンケート内容を作成するのに苦心した。
6. とりかかりの時期がおそすぎた。
7. 良い文献に恵まれなかった。
8. グループ内での意見のまとまりがなかなかできなかった。
9. テーマに対する資料不足
10. 他力本願型の人がいた。

11. 意図に沿った考察がむずかしかった　。

12. 家庭訪問してアンケートをとることがむづかしかった。

総合実習の目的の中に〃病院・地域・施設で行なわれる看護をもうらした形で看護を考える〃というねらいを持っているが、学生の感想の中に地域への取り組みに苦心したことが表現こそちがっても多く出されている。しかし2年過程の進学コース（専攻科を含む）における保健所実習時間は45時間であって、本県の実状で地域看護は実習出来ていない。このことからしてカリキュラム自体においでも、現状においても学生の感想を解決するすべはないと思われる。免許にこだわることなく地域看護について知識を深めなければ、看護をより理解することは出来ないという見地から（このことは保健所実習1週間における学習効果も非常に大きいと思われる）保健婦・助産婦学校進学の動機づけになっている。

(4) 卒論を終えての感想

卒論を終えての感想は表XIのとおりである。

表XI　在学中の感想

感想内容		%	
1	人間関係がより緊密になった	3 (11.1)	4 (14.8)
	アンケートをとるさいの会話の仕方が勉強になった	1 (3.7)	
2	卒論をすることによって今後の看護に対する指標の一つとなった	5 (18.5)	17 (62.9)
	看護の学問に対する充実感を満喫できた	5 (18.5)	
	考える姿勢が養われた	1 (3.7)	
	他人の発表に関心を示す姿勢ができた	1 (3.7)	
	各学科との関連性が理解できた	1 (3.7)	
	発表を終えた時の感動は忘れることができない	1 (3.7)	
	専攻科の生徒としての使命感を果たしたという感じである	1 (3.7)	
	学問に対する自信を得た	2 (7.4)	
3	卒論の発表のみで終るのは、つまらない何かものにして残したい	4 (14.9)	4 (14.9)
4①	疲れるだけで意義を感じなかった	2 (7.4)	2 (7.4)

卒業生の感想

	感想内容	%	
1	チームワークの大切さがわかった	3 (3.9)	7 (9.1)
	協力性や積極性が得られた	1 (1.3)	
	1つの目標に向って協力してやるむずかしさとすばらしさを感じた	3 (3.9)	
2	成しとけたという充実感を味わえた	15 (19,3)	54 (69.0)
	看護とは何かを自分で考えることができた	6 (7.6)	
	卒業後の看護に対する姿勢ができた	7 (8.9)	
	広義の看護に興味を持つことができた	5 (6.4)	
	科学的に問題点を分析する姿勢ができた	6 (7.6)	
	地域社会の健康問題に興味がもてた	1 (1.3)	
	卒論の発表から視野を広げることができた	8 (10.2)	
	機能別看護体制をとっている職場では学び得たことを生かすのはむづかしい	2 (2.5)	
	何事にも何故かと原因を追求する姿勢ができ今のところ向上する努力をしている	1 (1.3)	
	〃看護とは何か〃と真剣に考えた学生時代からすれば毎日の看護はまだまだ看護ではない〃と思う。	3 (3.9)	
3	自分の気持を文章化したり発表する訓練ができた	1 (1.3)	13 (16.7)
	社会資源の活用がわかった	1 (1.3)	
	自信ができた	8 (10.2)	
	看護研究会などで発表する姿勢が養われた	3 (3.9)	
4	① 精神的につかれた	1 (1.3)	1 (1.3)
	② 健康上の問題点について生の声がきけた	3 (3.9)	3 (3.9)

これは感想を自由に表現させたものであるが、次のようにまとめることができた。

1. チームワークの必要性がわかった。　(在学生14.8%　卒業生9,1%)
2. 科学的裏付けをもって患者及び看護活動を見つめる姿勢ができた。
   (在学生62.9%　卒業生69%)
3. 研究会、研修会に参加する意義を認識し興味を感ずる。(在学生14.9%　卒業生16.7%)
4. その他
   ① 疲れるだけで意義を感じなかった。　(在学生　7.4%　卒業生　1.3%)
   ② 健康の問題点について生の声がきけた。　(卒業生　3.9%)

前述の卒論テーマを通じて〃看護とは何か〃を考える過程において、学生は看護に対する科学性と実践性への方向がうかがわれる。卒業後においても看護に対する自信と興味ができ、看護に取り組む姿勢と全人的看護のために視野を広く持たなければならないという姿勢で取り組んでいることがわかる。なお〃疲れるだけで意義を感じなかった〃ものが在学生で7.4％、卒業生で1.3％いることは、少数意見とはいえ、今後教師側として考えなければならないことであろう。

Ⅷ　ま　と　め

衛看と進学コース（専攻科も含める）の関係は、理屈ぬき教育プラス理論づけ教育の路線と考える。例えば、基礎看護においても先づは手順と必要物品、注意事項をしっかり覚えること、これが完全に熟練できることは、患者をより快の方向へ向けることである。その上に〃なぜ〃〃どうして〃の問いかけをし、実践した行為の結果について評価をするという過程を上積することである。各種学校で教育を受けて進学コースへ入った場合には、看護婦までの展望はあっても、実践するためには立場のちがった学院又は学校において教育されるために一貫性を持つことが非常にむずかしい。

一方進学コースにおいても衛看での教育の現状がわかっていなければ一貫性をもった教育はむずかしく、限られた指定規則の時間内においては、相当重復をさけていかなければ、看護の本質論にまで深めることがむずかしい。現在、衛看存続について論義されるけれども5年間の展望をもって前述のことを考慮して教育を展開するならば、１５才で人間看護というものをよう理解しなかった者が、総合看護をなし得るだけの行動変容が期待できるということがわかった。なお、このレポートは、中間報告であるために、公立病院、私立病院に就職したものがどのように受けとめ方がちがうのか、また、卒業後の年数が浅くその差をみることは出来なかったが、彼女達のおかれている立場（環境）により多少の差はでると想像されるが、どのような施設に就職し、看護職に従事しようとも、在学中に培われた科学的にみつめてゆく姿勢がうすれることのない医療、看護体制になることを切望したい。

（以上）

参　考　文　献

1）　波多野梗子　：看護学総論の位置づけ　　看護教育№１２．１９７２

2）　湯槇ます他　：看護学総論　　医学書院

3）　ガイダンス編集委員会編：看護学校カリキュラム　　最新ガイダンス　メヂカルフレンド社

4）　文部省編　：高等学校学習指導要領解説　看護編

5）　波多野梗子他：進学課程における看護学総論学内実習のすすめ方

看護教育№６　№７　１９７２